

令和2年度(前期日程)
入学者選抜学力検査問題

国 語

(国語総合・現代文B・古典B)

試 験 時 間 120 分

文学部, 教育学部, 法学部, 医学部(保健学科看護学専攻)

問 題	ページ
㊦～㊨	1～11

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで, この冊子を開いてはいけません。
 2. 各解答紙に志望学部・受験番号を必ず記入しなさい。
なお, 解答紙には, 必要事項以外は記入してはいけません。
 3. 解答は, 必ず解答紙の指定された場所に記入しなさい。
 4. 試験開始後, この冊子又は解答紙に落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所などがあれば, 手を挙げて監督者に知らせなさい。
 5. この冊子の白紙と余白部分は, 適宜下書きに使用してもかまいません。
 6. この冊子をとめている針金は, 解答時に取りはずしてもかまいません。
 7. 試験終了後, 解答紙は持ち帰ってはいけません。
 8. 試験終了後, この冊子は持ち帰りなさい。
- ※この冊子の中に解答紙が挟み込んであります。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

社会学というものを仕事にしていると、いやでも社会とは何か、^①ということについて考えざるをえない。社会学者だけではなく、社会に生きている人びとすべてが一度は、社会って何だろう、と考えているはずだ。それを世界とか世間とか世の中とか、別の言葉で表現していたとしても、それはすべて社会のことだ。私たちはいつも社会のことについて考えている。

社会とは何だろうか。一般的にはそれは、人びとがお互いにつながっている状態である、とよく言われる。だが、本当にそうだろうか。私たちはみな、社会のなかで生きている。社会というものがつながりと同義なら、どうして私たちは毎日、こんなに寂しいのだろうか。すでに私たちがつながっているのなら、どうしてこんなにも、孤独を抱えて生きていかなければならないのだろうか。そもそも、それがすでにつながった状態なら、なぜ私たちは、何度も何度も、つながりの必要性を叫んでいるのだろうか。

社会というものがつながりであり、そのつながりのなかで私たちが生きているとすれば、なぜ「[※]わずかなお金で美ら海ちゅうみを売り飛ばした沖縄人」というような語りが、権力に批判的なのは※のナイチャーの元教員の口から出てくるのだろうか。

私たちは実は、つながっていないのではないか。私たちは、私たちとは異なった歴史を歩んでいる人びとのことを、理解することができているのだろうか。

もちろん、言葉のもっとも広い意味では、私たちはみなつながっている。だがそれは、流通や通信、分業あるいはもっと一般的に「市場」という言葉で表現したほうが良いような気がする。そこでなら、私たちはつながっている。あるいは、つながらざるをえない。そこから離れては生きていけないからだ。

たとえば私たちが、私たちの気付かないならかの糸でつながっていると、そこに社会と^②いうものの本質を持つてくるのは、どこか違和感がある。おそらく、社会というものが、ほかの領域、たとえば法律や経済などと区別されるのは、それが人びとのつながりでできているという点ではない。

「社会」なるものの本質がつながりでないとすれば、それは何だろうか(そもそも「本質」なるものをここで私が勝手に決めてよいかどうかともわからないが)。私はそれは、実は交換できないということにあると思っている。だから、つながりとはむしろ逆だ。社会とは、交換できないものたちの集合である。

経済的な領域では、基本的には私たちはすべて交換可能である。いま私が大学でしている仕事も、厳密に言えば、ほかにできる者はいくらでもいる。私がこの職場にいることに、たまたま公募を通過したということ以外の必然的な理由はない。労働というものはそういうものであり、雇用⑦ケイヤク⑧というものはそういうものである。もちろん、あらゆる職場のあらゆる仕事は、それ自体がローカルな知識⑨のシユウセキだから、現実的にはすぐその場での交換は難しい。しかし原

理的には、それぞれの仕事には、その担い手についての内的な必然性はない。私たちは全員、交換可能な存在である。

全員が原理的に交換可能になると同時に「かけがえない個人」という概念が生じるのは、とても興味深い。しかしこのかけがえのなさは、とても抽象的なもので、それ自体が交換可能である。つまり、「誰もが」かけがえのない個人である、という意味でそれは、全員が交換可能である。あるかけがえのない個人を、ほかのかけがえのない個人に交換しても、そのかけがえのなさは変わらない。^②ここでも、任意の等価交換がいつでも可能なのだ。

しかし、こういうことがあった。十年以上も前のこと、大阪のある女子大での非常勤の授業をいくつか担当していた。その女子大は古くて大きな公園の隣にあった。時間があると私は、その帰りなどに、その公園のベンチに座って本を読んだり、音楽を聴いたりしていた。それはとても気持ちの良い、静かな公園だった。いつか授業中にいちど、教室にいた女子学生たちに、公園気持ちいいよね、大学の授業なんかサボって、ああいうところのベンチでゆっくり本とか読むといよ。

そういう話をした、ということ、帰宅してから連れあいに話すと、彼女は苦笑いしながら、若い女性がそういうところで、ひとりでベンチに座って本を読むということが、どれだけリスクがあることなのかを、私にじっくりと説明した。説明は最後には説教になっていた。

私は彼女の語った、そういうことを、言葉というものを通じて、合理的に理解した。あれから二度と、授業中の雑談でも、そういうことは話していない。しかしやはり、私は公園のベンチに座るだけでリスクを伴ってしまうような、そういう存在「そのもの」になることはできない。そういうときの感情や経験を想像することはできるが、私はそういうリスクを背負った存在と、私そのものを交換することはできない。

私は若い女性が、その日常の中でどれほどのリスクとともに暮らしているかを、頭では、理屈では理解していたつもりになっていたが、まったく不十分であったことを、連れあいから教わった。もちろんいまでも不十分なままだ。女性というものが、あるいは男女のワクにもはまらない少数者たちが、どのようなリスクとともにあるか。そういうことの意味は、いくら勉強してもしたりない。深刻な被差別や、災害や戦争の体験者の、その体験を私たちは知ることにはできない、ということ、いうまでもなくわかっているつもりでいた。しかし、公園のベンチで本を読むことは、私の隣人であるそのような人びとと、立場を交換することができない。したがって「自分のこととして」理解することも、非常に難しい。私にとっては常にそれは、言語によって伝えられるものであり、合理的にしかり理解できないものである。

私たちは、経済的な領域としての労働市場においては、無限に他者とその位置を交換することができる。しかし、例えば私には、女性であること、リスクや、民族的少数者であることが、あるいは身体や精神において多数者と異なる状態にある人びとの生活というものを、それら

のそのままの形で、経験することができない。雇われた会社員やアルバイトとして私たちは、つねに流動し、果てしない移動を繰り返し、他人とその場所を交換しあっているが、そこで私たちは突然、透明な冷たい壁に、音もなくぶち当たることがある。

私たちはそこで、実体化した社会という壁に、頭をぶつけているのである。そして実は、言葉というものは、交換できないものたちの間でしかうまれない。言葉はそもそも、なりかわるものができないものたちが、それでも何かを伝え合うためのものだからだ。このようにして私たちは、毎日の生活のなかで、なんとか言葉をツムギだしていくのである。

語らなければならない。私たちは、沖繩について語る必要がある。私たちと沖繩とをへダてる境界線の真上で、境界線とともに、その境界線について、語る必要があるのだ。

私たちは、たとえば沖繩戦や米軍統治、あるいはコザ暴動という沖繩の人びとの歴史的経験そのものを、自ら体験することはできない。沖繩に限らず、そもそも私たちは、私たちの個人的な経験を交換できないようになっていく。私たちは社会のなかで生きていくにもかかわらず、経験を交換できない。これはとても、本質なことだ。私たちは言葉を交わして、社会のなかで他者と関わって生きているのだが、それぞれの経験や体験を交換することができない。できることはただ、言語という、まったく個人的でないような公共的な道具を使つて、おたがいに合理的に「理解」しあうことだけなのだ。

(岸政彦『はじめての沖繩』による)

(注) 「わずかなお金で」というような語り……この本文の前の部分で、米軍基地建設の受け入

れ判断をした自治体の首長をこのように批判した、関東出身の元教員のガイドの話が紹介されている。

ナイチャー……内地(本土)の人。本書では「沖繩以外の都道府県のひとつ」と説明されている。

問一 傍線部⑦から⑩の片仮名を漢字に直せ。

問二 傍線部①に対する筆者の答えを、本文中から一文で抜き出せ。

問三 傍線部②はどのようなことを述べているか。「ここでも」の内容を明確にしながら、本文中の例に基づいてわかりやすく説明せよ。

問四 本文全体を通じて、筆者は、社会における相互理解をどのようなものと捉えているか。わかりやすく説明せよ。ただし、「交換」という語を必ず使うこと。

二

次の文章は、魯迅ろしんの小説の一部である。中国のS市に住む「私」は、偶然に魏連受ウェイリエンシュという教師と知りあうことになった。読んで、後の問に答えよ。

私たちが三回目に顔をあわせたのは、その年の冬のはじめ、S市のある本屋でのことであった。両方から同時にうなずきあった。見知ってだけはいたのである。しかし、私たちが親しくなったのは、この年の暮、私が失業して以来のことである。それからというもの、私はしょっちゅう、連受リエンシュを訪問するようになった。ひとつには、むろん、退屈していたせいであるが、ふたつには、人の噂うわさで、彼が、あれほど冷たい性格でありながら、失意の人間にたいしては非常にうちとけるということを耳にしていたからであった。人生の浮沈は定まりなく、失意の人といっても、永久に失意の人であるわけではない。したがってまた、彼には永久の友がないわけになる。この噂は、はたして嘘うそではなかった。刺さを投ずると、すぐに招じられた。二間ぶつ通した客間には、装飾とてなく、イスやテーブルのほかには、少しばかり書架が並べてあるだけであった。人の噂では、彼は恐るべき「新党」※だと言われているが、その書架には、たいして新しい書物はなかった。私が失業したことを、彼はすでに知っていた。だが、きまりきったあいさつはすぐにすんでしまった。そして、主客ともに黙々として相対するばかり、しだいに気づまりな感じになった。見てみると、彼はたちまちのうちに一本のタバコをふかしおわり、吸い口が指をこがしそうになってから、床へ投げすてた。

「吸いませんか」手を伸べて二本目を取ろうとして、彼はだしぬけに言った。

そこで私も一本つまんで、吸いつけた。教員生活の話や、書物の話など、少しばかりしているうちに、またも気づまりな感じになった。私は、帰ろうと思つた。そのとき、表にガヤガヤという人声と足音とがして、四人の男女の子どもが、とびこんできた。大きいのは八、九歳、小さいのは四、五歳であった。顔も、手足も、着物も、すべて垢あかじみ、しかも相当にみにくかった。ところが、連受リエンシュの瞳ひとみには、たちまち喜びの光が輝いた。いそいで立ちあがって、客間の隣りの部屋のほうへ行きながら、こう呼びかけるのであった――

「大良タライヤン、二良アルリヤン、みんなおいで。きのう、ハモニカがほしいと言つたろう。買っておいでやつたよ」

子どもたちは、そろって彼のうしろへ詰めかけた。すぐとまた、めいめいハモニカを吹きながら、そろって出てきた。客間から出ていったかと思うと、なにやら急に喧嘩けんかがはじまった。ひとりが泣き出した。

「ひとりに一つだよ。みんな同じだよ。喧嘩するんじゃないよ」彼は、子どもたちの背後から、こう言つて戒めた。

「ずいぶんおおせいですね。だれの子どもですか」私は尋ねてみた。

「家主の子どもです。母親がいないのです。おばあさんがいるだけで」

「家主はひとりものですか」

「そう。細君が死んでから三、四年になるかな。あとをもらわないのです――でなかったら、ほ

くのようなひとりものに、部屋を貸したりしないでしよう」そう言うと、彼は冷やかな微笑をもらした。

私は、なぜ彼がいまだに独身でいるのか、よっぽどきいてみようかと思ったが、まだそう深いつきあいでもないのです、つききかねた。

つきあってみると、^{リエンシユ}連爻は、なかなか話のわかる人物であった。すこぶる議論ずきであり、その議論が、往々にして奇警^{キケイ}であった。ただ、彼の来客たちのなかには、どうにもがまんのならぬ手合いもあった。たぶん、^{ユクアツ}郁達夫の『沈淪^{ちんりん}』を読んだせいなのだろう、しょっちゅう自分で自分のことを「不幸な青年」とか「余計者」などと称し、蟹^{かに}のようにつそり、だが傲慢^{ごうまん}に、イスにふんぞりかえって、ふっと嘆息をはきながら、眉をひそめてタバコをふかしているのである。それにまた、あの家主の子どもたちときは、いつも喧嘩ばかりして、皿^{さら}や碗^{わん}をひっくりかえしてまで菓子をねだる始末で、うるさくて頭がくらくらするほどである。しかるに、^②連爻^{リエンシユ}は、子どもの顔さえ見れば、ふだんの冷やかな態度とは打って変わって、まるで自分の命より大事なようなそぶりである。話にきくと、あるときのこと、^{サンヤン}三良^{シヨウリョウ}が猩紅熱^{しやうこうねつ}だったので、彼はあわてふためいて、黒い顔がますます黒くなったそうである。ところがその病気が、案外軽いものだったので、のちになって、子どもたちの祖母から、さんざん冷やかされたということである。

「なんといつても、子どもはいいね。まったく天真だから……」私がうるさがつていることを彼は感づいていたらしく、ある日、わざわざおりをとらえて、こう私に言った。

「そうばかりとは限るまい」私は、いかげんな返事をするより手がなかった。

「いや。おとなの悪い癖は、子どもにはないよ。後天的な欠点、君がふだん攻撃するような欠点は、環境がそうさせるだけさ。先天的には決して悪くない。天真さ……ぼくは、中国に希望が生まれるとすれば、この点だけだろうと思う」

「いや。もし子どものなかに悪の根がないとすれば、大きくなってから悪の実がなるはずがないよ。たとえば、一粒の種にしても、内部に枝や、葉や、花や、実になる胚子^{はいし}が本来的に含まれていればこそ、成長してから、それらのものが生まれてくるのだ。まさか、なんにもなかったものならば……」私は当時、無聊^{ぶりょう}に苦しんでいたので、[※]大官連^{ダイクワンレン}が下野すると精進したり参禅したりするのと同じように、仏経を読んでいた。むろん、仏理がのみこめたわけではなかったが、おくめんもなく、でまかせに言ってみただけである。

ところが^{リエンシユ}連爻は、すっかり腹を立ててしまった。ジロツと私をにらんだまま、もう口をきかなかった。それは、言うべきことがなくて言わないのか、それとも、言いたくないだけなのか、私にも想像がつかなかった。ただ、しばらく見なかった冷やかな態度が、また彼にあらわれたのに気がついただけであった。黙りこくって、たてつづけに二本タバコをふかした。三本目に手を出したとき、私はたまりかねて逃げ出した。

この気まずさは、三月もの長いあいだつづいて、ようやく解けた。解けた原因は、一半は、おそらく、忘れたためであろう。一半は、彼自身が、この「天真」な子どもによって迫害されるに至り、そのため私の子どもに対する冒瀆^{ぼうとく}の言葉も、情状酌量^{じやうじやうしやくりやう}すべきものがあると気がついたか

らであろう。もっとも、これは私だけの推測である。それは、私の寓居ぐきゅうでの、酒の席でのことであつた。いくらか悲しそうに見える表情で、なかば頭をあげながら、彼は言うのであつた――

「考えてみれば、実際、変な気がするよ。君のところへ来る途中で、往来にちっちゃな子どもがいたが、葦あしの葉を手にして、ぼくのほうへ向けて、やつつけろ、と言うのだ。まだヨチヨチ歩きしかできない子どもなんだが……」

「環境が悪くさせたんだね」

言つてしまつてから、すぐ私は、自分の言葉を後悔した。だが彼は、少しも気にかけるふうはなく、しきりに酒を飲み、そのあいまにしきりにタバコをふかしていた。

「そう言えば、ぼくは君にきくのを忘れていた」私は、ほかの話をもちだして、その場をごまかした。「君は、めつたに人を訪問しないたちが、なんだつて今日は、気がむいたんだい。ぼくらは知りあつてから一年あまりになるが、君がぼくのところへ来るのは、今日がはじめてじゃないか」

「それを言おうと思つていたところなんだ。ここしばらく、絶対にぼくの家へは来ないでもらいたい。ぼくの家には、いま、じつにいやなやつが、おとなひとりと子どもひとり、いるんだ。まるで畜生だ」

「おとなひとりと子どもひとり？ だれのことだい」私は、へんに思つた。

「ぼくのいとこと、その子どもさ。ハッハッ、せがれのほうも、おやしそつくりさ」

「町へ来て君にあつて、ついでに見物でもしようというわけかい」

「いや、ぼくに相談があるというのだ。その子どもを、ぼくの養子にしろというのさ」

「ほう、養子」私は、思わず叫び声をあげた。「君はまだ結婚まえじゃないか」

「ぼくが結婚しないことを知つてやがるのだ。もっとも、そんなことは、どうだつていい。やつらのほんとうの気持は、あの寒石山フシヤンのぼろ屋敷に養子を取らせたいのさ。ぼくは、ほかには無一文だ。君の知つてのとおり。金は、はいればすぐ使つてしまふ。あのぼろ屋敷しかないのだ。

やつら親子の一生の事業が、あそこを借りて住んでいる女中※を追い出すことなのだ」

その口調の冷酷さは、思わずゾツとしたほどであるが、私はなおも彼をなだめて言つた――

「君の親戚だつて、まさかそれほどではあるまい。ただ、思想が少し古いだけさ。たとえば、あの年、君がわいわい泣いたときなど、真剣になつて君をとりまいて、一生懸命に慰めてさ……」
「おやじが死んでからというものの、ぼくの家を捲まきあげたい一心で、ぼくに証文に判をつかせようと思つて、ぼくが泣いたときでも、それで真剣になつて一生懸命に慰めたわけさ……」そのときの情景を探し出そうとでもするかのようにな、彼は両眼を、じつと空に向けていた。

(魯迅作・竹内好訳「孤独者」による)

(注) 刺を投ずる……名刺を出して面会を求める。刺を通ずる。

「新党」……ここでは連^{リエンシュイ}受が進歩的な思想の持ち主であることを指している。

すぐと……時間を置かないさま。すぐに。

奇警……すぐれて賢いこと。言動が並はずれていて奇抜であること。

郁達夫……中国近代の文学者(一八九六—一九四五)。『沈淪』は一九二一年発表の小説。

猩紅熱……小児に多い感染症の一種。急な高熱と赤い発疹^{ほっしん}を特徴とする。

大官連……位の高い官職にある人々。

女中……個人の家や料理店などに雇われて家事や雑用に従事する女性を指す歴史的呼称。

問五 傍線部①について、なぜそう言えるのか。わかりやすく説明せよ。

問六 傍線部②について、連^{リエンシュイ}受の態度の背景にある子どもに対する考え方はどのようなものと推測されるか。次の文の空欄 A と B に本文中の言葉をそれぞれ抜き出して入れよ(いずれも句読点は含まない)。

子どもは に純真無垢であり、将来への を与える存在であるという
考え方。

問七 文中から読みとれる連^{リエンシュイ}受の人物像について、子どもに対する態度の変化を踏まえた上で、わかりやすく説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の都合上、会話を示す記号の一部を省略してある。

奥州に百姓ありけり。^A慳貪^{けんこん}にして、妻子^{たみ}の為にも情けなかりければ、妻たびたび逃げけるを、捕へて置きけり。ある時、五六歳なる子を抱きて、地頭の許^{もと}にゆきて申しけるは、「夫にて候ふもの、あまりに情けなく慳貪^{けんこん}に候ふ故^{ゆへ}に、たへ忍びて相そふべき心地^{こころち}も候はず。御下知^Bを蒙^{かうぶ}りて、放^{はな}れ候はば、然^{しか}るべく候ひなむ」と申す。地頭いはく、「夫こそ妻をさる事あれ。妻として夫をさる事、いかなる子細ぞ」と尋ねらるる。「あまりに情けなく候ふ事、さのみは申し難く候ふ。一事を申さば、餘事^{よじ}は御邊迹^{おきづぎ}あるべく候ふ。この程山河^{やまかな}に罷^{まか}りて大きな鮎^{あゆ}を三十ばかり取りて帰りて、少々は煮て食ひ候ふ。残りは鮎^{すし}にして置き候ふ。この子只一人候ふが、父よ魚食はうと申して、取り付きて泣き候ふを、やれ未だ煮へぬぞとて、こころみこころみ只独り食ひて、この子にたび候はず。³ましてわらはには、思ひだによらず候ひき。さりとも鮎はたび候ひなむと思ひしに、いまだ成らぬぞ成らぬぞと申して、一つもたび候はず。是^{これ}を以てよろづ御心得候ふべしと申す。夫を召して引き合はするに、「妻が申す状違はず」と申しければ、不当^{ふたう}の者なりけりとして、境^{さかい}を追ひ越しぬ。⁴妻丸^{つままる}はいみじく今までも相つれたり、情けありとて、女公事^{おんなくじ}ばかりして、男公事は許りにけり。

(『沙石集』による)

(注) 邊迹……推測すること。

鮎……魚介を塩にまぶして米に漬け、発酵させた食品。現在の熟れ鮎。

妻丸……「丸」は人・動物・物品等につけて、親愛の意を添える接尾語。

女公事……領主から女性に課された雑税。

問八 傍線部A、B、Cの語の文脈にもっとも即した意味を選択肢ア～エの中から選び、記号で答えよ。

A	慳貪	ア	度胸がない	イ	無愛想	ウ	物惜しみ	エ	怒りっぽい
B	下知	ア	知恵	イ	推察	ウ	任命	エ	沙汰
C	状	ア	取り決め	イ	内容	ウ	書式	エ	手紙

問九 二重傍線部「たび」について、敬語の種類と「誰の」「誰に対する」敬意であるかを答えよ。

問十 傍線部①、②、③を文脈に沿って現代語訳せよ。

問十一 波線部「あまりに」から始まる妻の発言について次の問に答えよ。

- (1) 妻の発言はどこまで続くか、発言の終わりの四文字を記せ。
- (2) 妻の発言中に出てくる夫の発言二箇所について、わかりやすく言葉を補って訳せ。

問十二 傍線部④について、誰がどうしたのかわかるように説明せよ。

四

次の文章は、作品と作者および読者の関係について述べたものである。読んで後の間に答えよ。ただし、返り点と送り仮名を一部省略してある。

夫綴^①文者情動而辞発、觀^ル文者披^レ文

以^テ入^ル情。沿^{ヒテ}波^ニ討^レ源、雖^モ幽^ト必^ズ顯^{ハル}。世^{クシテ}遠

莫^{キモ}見^ル其^ノ面^ヲ、覘^レ文^ヲ輒^チ見^ル其^ノ心^ヲ。豈^ニ成^ス篇^ノ之

足^{ランヤ}深^{キニ}、患^{フル}識^ス照^ス之^ヲ自^ラ浅^{キヲ}耳。夫志^②在^ル山水、

琴表^ス其^ノ情。況^{ンヤ}形^ニ之^ヲ筆^ニ端^ニ、理^{ハタ}将^{クンゾ}焉^{カクレンヤ}。匿^ス。

故^ニ心^ノ之^ヲ照^ラレ^{ラスコト} **A**、譬^{ヘバ}目^ノ之^ヲ照^ラレ^{ラスガゴトシ} **B**。目^{アキラカナレバ}瞭^ス

則^チ形^{トシテ}無^ク不^ル分^{ナラ}、心^{サレケレバ}敏^チ則^チ理^{トシテ}無^ク不^ル達^セ。然^リ而^{シテ}

俗^ニ監^ス之^ヲ迷^ハ者、深^{キヲ}廢^{シテ}浅^{キヲ}售^{オこなフ}。此^③莊^ノ周^ノ所^ニ以^テ

笑^フ折^レ楊^ヲ、宋^ノ玉^ノ所^ニ以^テ傷^{いたム}白^ノ雪^也。

(『文心雕竜』による)

(注) 成篇……整った文章。

識照……見分けること。

分……明らかであること。

俗監……見識が狭いこと。またそのような人。

莊周……莊子のこと。中国、戦国時代の思想家。

折楊……古代の卑俗な楽曲の名。『莊子』天地篇に、偉大なる音楽は俗人の耳には入らないが、「折楊」や「皇蓉」といった俗曲に俗人はわつと沸き立つものである、という一節がある。

宋玉……中国、戦国時代の楚の文人。

白雪……古代の高尚な楽曲の名。宋玉の文章「楚王の問ひに對ふ」に、「下里」や「巴人」のような卑俗な楽曲には唱和する者が数千人、「陽阿」や「薤露」のような並の楽曲には数百人いるが、「陽春」や「白雪」のような高尚な楽曲には数十人しかいない、という一節がある。

問十三 傍線部①を現代語に訳せ。

問十四 傍線部②を書き下し文に直せ。

問十五 空欄A Bには次のア～オのいずれかの文字が入る。適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 形

イ 文

ウ 理

エ 心

オ 目

問十六 傍線部③について、筆者は莊周があざけつたり、宋玉が悲しんだりしたのはなぜだと考えているか。全文の内容を踏まえて、簡潔に説明せよ。